

ほっかいどう

金曜楽しむ

土曜考える 火曜学ぶ 水曜

Journey through the past

文・谷口 雅春 写真・露口 啓二

# 光を見に行く

## 海と陸と大河、脈打つ地形



石狩川河口

### 石狩市 石狩川河口

土地は生きている。石狩川の河口に立つといつもそう思う。海と陸と大河が巨大な力で拮抗するこの場所には、固定されたものがまるでない。僕たちはその不確定で流動的な世界の自由さや不思議に引かれる。

石狩川左岸の河口は、石狩灯台からジョギングで数分。距離にして1.5キロくらいだ。しかしふつう灯台は海に面して建てられるから、この距離はなんだか中途半端だ。そう思って明治期の地図を見ると、灯台はずっと海に近い。つまりそのぶん砂嘴が成長して、渚が灯台から遠のいたのだ。石狩川が運んでき

た土砂が、北上する対馬暖流の力で北側に延ばされていったことがわかる。もっとも道北の天塩川では砂嘴は延々と南に延びているから、海と陸と大河のぶつかり合いは、それほど単純な営みではないのかもしれない。

人気のない砂嘴の先端では、石狩川と日本海の境界が溶けていく。小樽の高島岬から雄冬岬までの雄大なパノラマが楽しめて、天気恵まれば日暮れまでいたくなるほどだ。実はこの場所に一年中通って、砂嘴の変化を記録している人がいる。「花畔・綱」というウェブサイトを公開している石川治さんだ。石川さん

はGPSロガーという装置をもって河口の波打ち際を7年間毎週歩きつづけることで、先端域が季節や天候によって大きく変動していることを記録した。すべての足跡をマップに重ねていったのだ。

石狩浜海浜植物保護センターで開かれていたそのパネル展で話を聞くと、まず、現在では砂嘴の成長がほぼ止まっていることを教わった。石狩川の流れが強くぶつかる右岸が水制工という施設で守られているために、砂嘴に延びていく余地がなくなったことや、上流からの土砂が減ったことが関係しているらしい。石川さんの研究は、水量が減る冬の砂嘴は海に押されて内向きになり、雪解けの春先には、川に押されて海側を向くことを見事に「見える化」した。さらに砂嘴の長さには冬と春では240メートルの伸び縮みがあり、振幅も数十センチに及ぶことを明らかにした。石狩の地誌に、なんてすばらしい一節が加わったことだろう。

人間をはじめたぐさんの生きものが関わりあっている土地の地形は、太陽や水系と交わりながらいきいきと脈打っている。地域と人々の営みは、こうした複雑なまとまりのほんの一部分なのだと思う。

小樽で生まれ育った古生物学者井尻正二の晩年の著作に『石狩湾』がある。愛する母への追慕と自らの幼年からの時の流れを石狩湾流に重ねた、美しい半生記だ。石狩川河口に立ちながら陸の水の旅の終着を見ていると、あらためて再読したくなった。